

初の共通テスト平均点は前年並み！

思考力系の出題目立つも、平均点大幅ダウンならず！

旺文社 教育情報センター 2021年3月18日

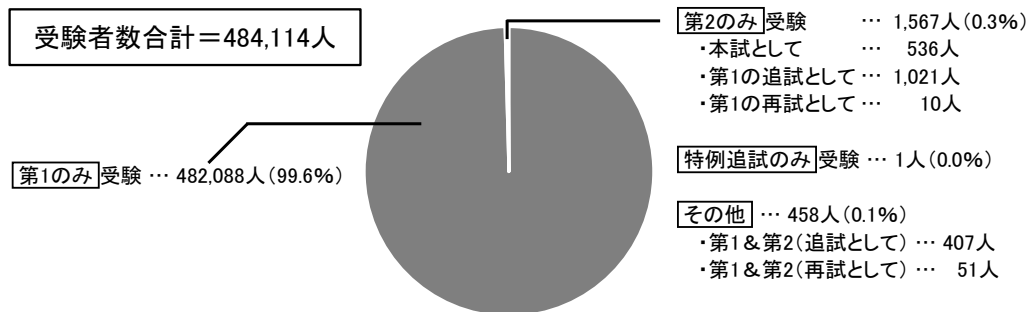
初の共通テストは、いわゆる「第1日程＝1月16日、17日」「第2日程＝1月30日、31日」「特例追試験＝2月13日、14日」のすべてが終了し、確定平均点等が入試センターから発表された。

思考力系の問題が本格的に出題されていくことなどから、平均点は大幅ダウンすることが予想されていたが、大半の受験生が集中した第1日程では、昨年のセンター試験並みにとどまった。

※本記事のデータは大学入試センター「実施結果の概要」(2月18日発表)をもとに作成。過年度データも同様。
 ※本記事では、「1月16日、17日実施の試験＝第1日程」「1月30日、31日実施の試験＝第2日程」と表記。第2には同日実施された第1の追試、再試も含む。
 ※特に断りのない場合、2021年の結果は第1日程、過年度の結果は本試のもの。

全体結果

●受験状況(第1、第2、特例追試合計)



本試が第1、第2の2回行われる異例の事態となった今年の共テだが、全体の実受験者数は48.4万人で、その99.6%が第1のみで試験を完了している。第2は2,000人程度(上グラフ「第2のみ」+「その他」)、特例追試はわずか1人だった。

今年気になるのは、新型コロナの直接的な影響だ。第1では「コロナ罹患者＝92人」「濃厚接触者(試験当日に受験するための要件を満たしていない者)＝132人」が当日受験できず、追試(＝第2)の受験許可を得た(受験許可者数なので受験者数とは異なる)。さらに「無症状の濃厚接触者で当日別室受験＝187人」、新型コロナとの関連は不明だが「試験当日の体調不良者＝898人」となった※。

第2では新型コロナを事由とした追試(＝特例追試)の受験許可者はいなかったが、「無症状の濃厚接触者で当日別室受験＝4人」、「試験当日の体調不良者＝28人」だった。

※第1の追試許可者については1月28日記事「[共通テスト“第1日程”追試験 受験許可者1,721人](#)」参照。

●「第1日程」平均点 ※本表は前年本試との比較。

2021年度 大学入学共通テスト(第1日程) 平均点等一覧[確定]

<2021年2月18日 大学入試センター発表>

教科	科目	2021年		2020年		前年差				
		受験者数	平均点	受験者数	平均点	受験者数	平均点			
基幹3教科 平均点合計(600点満点) 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語】		— (得点率)	350.08 58.3%	— (得点率)	336.31 56.1%	— (得点率差)	13.77 +2.3ポイント			
国語(200点)		457,305	117.51	498,200	119.33	▲ 40,895	▲ 1.82			
地理 歴史・ 公民	地理歴史(100点)	世界史A	1,544	46.14	1,765	51.16	▲ 221	▲ 5.02		
		世界史B	85,690	63.49	91,609	62.97	▲ 5,919	0.52		
		日本史A	2,363	49.57	2,429	44.59	▲ 66	4.98		
		日本史B	143,363	64.26	160,425	65.45	▲ 17,062	▲ 1.19		
		地理A	1,952	59.98	2,240	54.51	▲ 288	5.47		
		地理B	138,615	60.06	143,036	66.35	▲ 4,421	▲ 6.29		
	公民(100点)	現代社会	68,983	58.40	73,276	57.30	▲ 4,293	1.10		
		倫理	19,955	71.96	21,202	65.37	▲ 1,247	6.59		
		政治・経済	45,324	57.03	50,398	53.75	▲ 5,074	3.28		
		倫理、政治・経済	42,948	69.26	48,341	66.51	▲ 5,393	2.75		
数 学	数学①(100点)	数学Ⅰ	5,750	39.11	5,584	35.93	166	3.18		
		数学Ⅰ・数学A	356,493	57.68	382,151	51.88	▲ 25,658	5.80		
	数学②(100点)	数学Ⅱ	5,198	39.51	5,094	28.38	104	11.13		
		数学Ⅱ・数学B	319,697	59.93	339,925	49.03	▲ 20,228	10.90		
		簿記・会計	1,298	49.90	1,434	54.98	▲ 136	▲ 5.08		
		情報関係基礎	344	61.19	380	68.34	▲ 36	▲ 7.15		
理 科	理科①(50点)	物理基礎	19,094	37.55	20,437	33.29	▲ 1,343	4.26		
		化学基礎	103,074	24.65	110,955	28.20	▲ 7,881	▲ 3.55		
		生物基礎	127,924	29.17	137,469	32.10	▲ 9,545	▲ 2.93		
		地学基礎	44,320	33.52	48,758	27.03	▲ 4,438	6.49		
	理科②(100点)	物理	146,041	62.36	153,140	60.68	▲ 7,099	1.68		
		化学	182,359	57.59	193,476	54.79	▲ 11,117	2.80		
		生物	57,878	72.64	64,623	57.56	▲ 6,745	15.08		
		地学	1,356	46.65	1,684	39.51	▲ 328	7.14		
		外国語(200点)	英語	リーディング(100点)	476,174	58.80	518,401	58.16	▲ 42,227	0.64
				リスニング(100点)	474,484	56.16	512,007	57.56	▲ 37,523	▲ 1.40
合計	—			114.96	—	116.07	—	▲ 1.11		
ドイツ語	109		119.25	116	147.90	▲ 7	▲ 28.65			
フランス語	88		129.68	121	138.41	▲ 33	▲ 8.73			
中国語	625		160.34	667	167.41	▲ 42	▲ 7.07			
韓国語	109	144.87	135	147.50	▲ 26	▲ 2.63				

<注>

- ① 英語の合計平均点は、2021年はリーディングとリスニングの平均点を足したものの、2020年は合計250点を100点に換算したものの、「筆記」(200点)、「リスニング」(50点)の平均点はそれぞれを100点に換算したものの。
- ② 表中の「平均点差」は、四捨五入の関係で「2021年-2020年」と一致しない場合もある。
▲印は「ダウン」(平均点)、および「減」(受験者数)を示す。
- ③ 得点調整は公民、理科②で実施。上表は調整後の得点。

第1では得点調整が公民、理科②で行われた。上表は調整後の得点だが、「中間集計その2(入試センター1月22日発表。各科目で99.9%以上の採点が完了)」では、以下の点差となっている。

- ・公民 …… 「倫理=71.96点」「政治・経済=49.87点」⇒ 22.09点の差。
- ・理科② … 「生物=72.65点」「化学=51.06点」⇒ 21.59点の差。

●「第2日程」平均点 ※本表は第1日程との比較。

2021年度 大学入学共通テスト(第2日程) 平均点等一覧[確定]

<2021年2月18日 大学入試センター発表>

教科	科目	2021年(第2日程)		2021年(第1日程)		「第2」-「第1」差		
		受験者数	平均点	受験者数	平均点	受験者数	平均点	
基幹3教科 平均点合計(600点満点) 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語】		— (得点率)	300.20 50.0%	— (得点率)	350.08 58.3%	— (得点率差)	▲ 49.88 ▲8.3ポイント	
国語(200点)	国語	1,587	111.49	457,305	117.51	▲ 455,718	▲ 6.02	
地理 歴史・ 公民	地理歴史(100点)	世界史A	14	43.07	1,544	46.14	▲ 1,530	▲ 3.07
		世界史B	305	54.72	85,690	63.49	▲ 85,385	▲ 8.77
		日本史A	16	45.56	2,363	49.57	▲ 2,347	▲ 4.01
		日本史B	410	62.29	143,363	64.26	▲ 142,953	▲ 1.97
		地理A	16	61.75	1,952	59.98	▲ 1,936	1.77
		地理B	395	62.72	138,615	60.06	▲ 138,220	2.66
	公民(100点)	現代社会	215	58.81	68,983	58.40	▲ 68,768	0.41
		倫理	88	63.57	19,955	71.96	▲ 19,867	▲ 8.39
		政治・経済	118	52.80	45,324	57.03	▲ 45,206	▲ 4.23
		倫理、政治・経済	221	61.02	42,948	69.26	▲ 42,727	▲ 8.24
数学	数学①(100点)	数学Ⅰ	44	26.11	5,750	39.11	▲ 5,706	▲ 13.00
		数学Ⅰ・数学A	1,354	39.62	356,493	57.68	▲ 355,139	▲ 18.06
	数学②(100点)	数学Ⅱ	35	24.63	5,198	39.51	▲ 5,163	▲ 14.88
		数学Ⅱ・数学B	1,238	37.40	319,697	59.93	▲ 318,459	▲ 22.53
		簿記・会計	4		1,298	49.90	▲ 1,294	
	情報関係基礎	4		344	61.19	▲ 340		
理科	理科①(50点)	物理基礎	120	24.91	19,094	37.55	▲ 18,974	▲ 12.64
		化学基礎	301	23.62	103,074	24.65	▲ 102,773	▲ 1.03
		生物基礎	353	22.97	127,924	29.17	▲ 127,571	▲ 6.20
		地学基礎	141	30.39	44,320	33.52	▲ 44,179	▲ 3.13
	理科②(100点)	物理	656	53.51	146,041	62.36	▲ 145,385	▲ 8.85
		化学	800	39.28	182,359	57.59	▲ 181,559	▲ 18.31
		生物	283	48.66	57,878	72.64	▲ 57,595	▲ 23.98
		地学	30	43.53	1,356	46.65	▲ 1,326	▲ 3.12
外国語(200点)	英語	リーディング(100点)	1,693	56.68	476,174	58.80	▲ 474,481	▲ 2.12
		リスニング(100点)	1,682	55.01	474,484	56.16	▲ 472,802	▲ 1.15
		合計	—	111.69	—	114.96	—	▲ 3.27
		ドイツ語	4		109	119.25	▲ 105	
		フランス語	3		88	129.68	▲ 85	
		中国語	14	161.14	625	160.34	▲ 611	0.80
		韓国語	3		109	144.87	▲ 106	

<注>

- ① 得点が空欄の科目は、受験者数が少ないため非公表。
- ② 表中の「平均点差」は、四捨五入の関係で「第2-第1」と一致しない場合もある。
▲印は「ダウン」(平均点)、および「減」(受験者数)を示す。

第2はほとんどの科目で平均点が第1を下回っているが、受験者数が非常に少ないため、これが問題の難易の差によるものかはわからない。得点調整も、第1と点差が開いても、もともと「第1-第2」間では行われない予定だった。旧センター試験の出題形式で行われた特例追試は、受験者が1人だったため公表されていない。

●「平均点＝前年並み」をどう見るか

基幹3教科の平均点合計、5教科6科目の加重平均点で見ても、第1の平均点は昨年のセンター試験並み（若干アップ）となっている。

【基幹3教科平均点合計】(国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語=600点満点)

=350.1点 (対前年+13.8点) (P.2参照)

【5教科6科目加重平均点】(国語+数学2科目+外国語+地歴公1科目+理科1科目=800点満点)

=472.3点 (対前年+15.1点) (P.5参照)

今年の共通テストは、平均点が大幅ダウンすると予想されていた。理由は次の3点だ。

【「平均点＝大幅ダウン」と予想されていた理由】

- (1)思考力系の問題 … 2018年11月の第2回試行調査は難易度が高く、平均正答率5割程度を目安に作問されていた（センター試験は平均点6割目安と言われている）。
- (2)学校休業による学びの遅れ … 新型コロナにより3月～5月の3か月間、全国でほとんどの学校が休業となった。
- (3)既卒生の大幅減 … 既卒生は全体的に現役生よりも得点が高いが、共通テストでは既卒志願者が大幅に減少した（対前年－約2万人）。

平均点が前年並みとなる要素はどこにもない。それにも関わらず、なぜこのような結果となったのか。要因は以下の3点が考えられる。

【「平均点＝前年並み」の要因①＝受験生ががんばった？】

今年の受験生には「新テストへの不安」「学校休業への不安」がある。これらの不安があるからこそ受験生は共通テストの対策を相当しっかりやったと考えられる（新型コロナで学校行事なども行われなかった）。実際、学習参考書協会の調査によれば、各出版社で昨年度と比べ、共通テスト対策書の売り上げが大幅増だったという※。

※学習参考書協会 2月「2021年度新学期 学参・辞典勉強会」より。

【「平均点＝前年並み」の要因②＝総合型・推薦型合格者が欠席した？】

今年の共通テストは欠席率が高い（P.5参照）。総合型・推薦型ですでに合格している層（⇒本気度が低い⇒低得点層）が、例年以上に共通テストを受けなかった可能性がある。

【「平均点＝前年並み」の要因③＝問題が易しめだった？】

やはり第2回試行調査に比べて易しめだったという受験生の声が多く聞かれる。また、今年は得点調整が行われたことから、入試センター側も難易度の設定に苦労したことが伺

える。得点調整はセンター試験 31 年の歴史の中で 2 回のみ（1998 年＝地歴、2015 年＝理科）※、共通一次でも 1 回（1989 年＝理科）しか行われていない。今年はそれが同時に 2 教科で行われる事態となった。

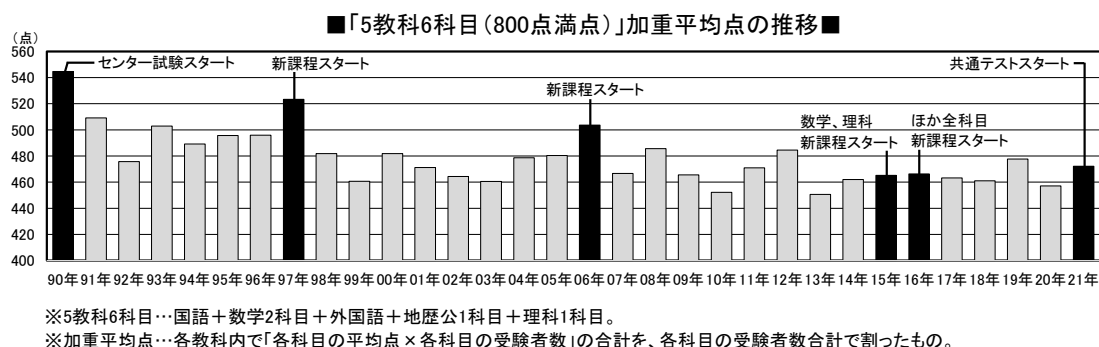
また、例年平均点が低い数学Ⅱ・B も、6 割近くまで点を伸ばした（平均 59 点は 19 年振り）。国語では新傾向とされていた現代文の「実用的な文章」が結局、メインの題材としては出題されなかった。

次項のグラフに示すように大きな変更がある年は平均点が高く、今年も同様だ。これが問題の難易によるものと言い切ることにはできないが、やはり抑え気味に作問されているのでは、と思えてしまう。

※1997 年のセンター試験でも数学で大きな平均点差が開いたが、このときは得点調整は行われなかった。

●「5 教科 6 科目（800 点満点）」加重平均点の推移

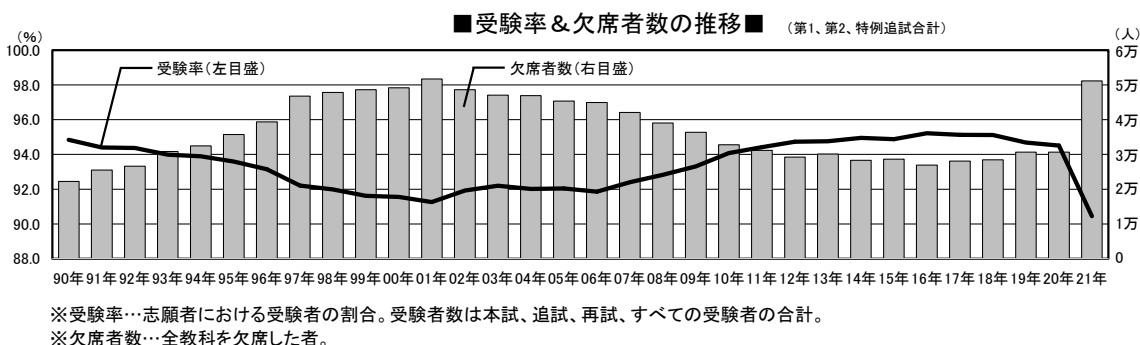
これまでのセンター試験との難易を比較するために、5 教科 6 科目（国語＋数学 2 科目＋外国語＋地歴公 1 科目＋理科 1 科目＝800 点満点）の加重平均の推移を見てみよう。



前述のとおり、特に新課程入試初年度といった出題内容、方針に大きな変更がある年は、平均点が高く出る。センター試験初年度の 1990 年は「平均点＝544.7 点、得点率＝68.1%」、今年「472.3 点、59.0%」だった。来年は下がる可能性が高い。

グラフの前半で平均点の下降が見られるが、これはセンター試験から私立大での利用がスタートし、その拡大とあわせて受験者の裾野が広がっていったためだろう。

●受験率、欠席者数の推移



- ・志願者数=535,245人
- ・受験者数=484,114人（志願者に対する受験率=90.4%、欠席者数=51,131人）

受験率は90.4%でセンター試験を含めて過去最低、欠席者は5.1万人で前年+2.1万人の大幅増、2001年の5.2万人に次ぐ過去2番目の多さとなった。今年の注目点は、「志願段階では現役生は減らず」、しかし「受験段階では欠席者が非常に多かった」という点だ。

志願段階から振り返ると、当初予想では今年、共通テストの現役志願者は大幅な減少が見込まれていた。新入試、新型コロナ、ここ数年の私立大の定員超過率の厳格化から、受験生の安全志向が非常に強まり、総合型、推薦型に流れると思われていたからだ。しかし予想に反して総合型、推薦型は増えず、共通テストの現役志願者は前年並みとなった※。

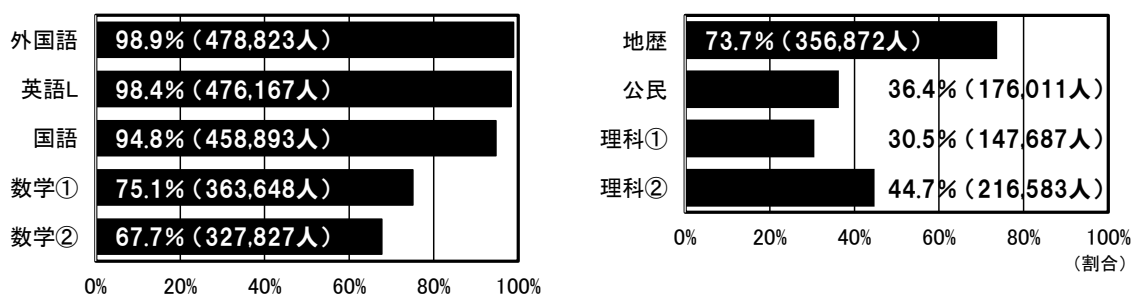
そして実際の受験では欠席者が多く出た。これは総合型、推薦型の合格者が多く欠席したためと考えられる。例年ではこうした受験生も、生活指導の一環として受けさせる（大学入学まで学習を継続させる）高校が多いと聞く。しかし今年は試験会場での新型コロナの感染リスクの回避や拡大防止から、「必要がなければ受けない」という判断になったのだろう。

※詳細は2020年12月8日記事 [「新入試&コロナ禍の共通テスト 初年度の志願者は53.5万人！」](#) 参照。

●教科別 受験率

下のグラフは、全受験者に対する各教科の受験者の割合。各教科の傾向は例年と大きく変わらない。理科①（基礎科目）は、2015年にスタートした現行指導要領の入試で登場してから毎年、受験率はアップし続けているが、それでも毎年、全教科の中でも最も低い。

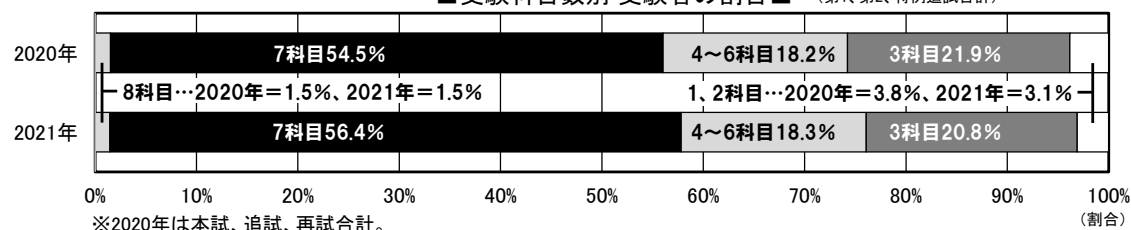
■教科別 受験率■（第1、第2、特例追試合計）



※数学①=Ⅰ、Ⅰ・A／数学②=Ⅱ、Ⅱ・B、簿記・会計、情報関係基礎／理科①=基礎科目／理科②=発展科目。

●受験科目数別 受験者の割合

■受験科目数別 受験者の割合■（第1、第2、特例追試合計）



例年、国公立大型（特に国立大）の7科目以上（7科目+8科目）の受験者は、全体の過半数を占める。今年も57.8%で2015年以降の現行指導要領の入試では最高値だ。しかし前述のとおり、今年も欠席者が多い。例年どおりに受けていれば、もう少し下がっただろう。

人数で見ると、昨年と比べて7科目以上の受験者数は、「29.5万人⇒28.0万人」で5.2%の減少。今年の大学受験生数自体は4%程度の減少が見込まれていて、それを上回っている。やはり今年も7科目以上の受験者が多かったとは言い難い。

科目別結果

※以下、特に断りのない場合、2021年の結果は第1日程、過年度の結果は本試。

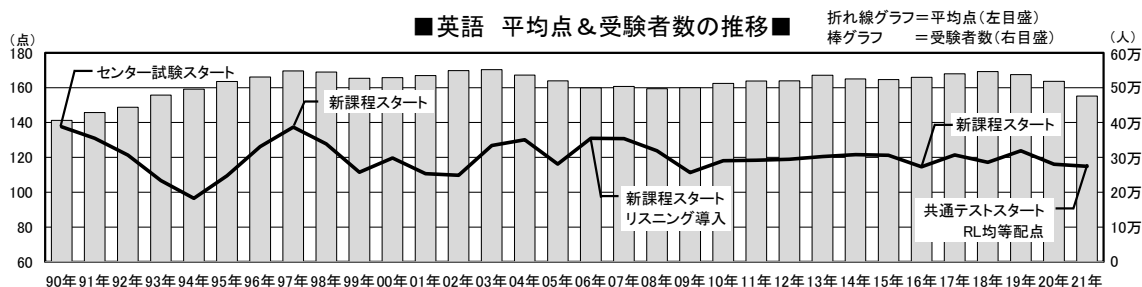
※文章中の点差等は対前年を示す。

全体的な出題傾向は、これまで入試センターが方針として示していたとおり、いわゆる思考力系の問題が多く出題された。思考力系の問題は「資料読解型」「課題解決型」「対話場面型」に大別できる。資料、現実的な課題、対話などが題材として扱われることで、必然的に問題で読み解く分量は増加した。その結果、思考力というだけでなく、読解力や情報処理能力が求められる内容となった。知識系の問題であっても、単なる暗記ではなく、意味、意義、活用の仕方、因果関係などの理解が必要な問題が目立った。

しかし難易度としては第2回試行調査ほど難しくはなく、センター試験とあまり変わらない。平均点も前年並みとなった。

●英語

配点がこれまでの「筆記200点、リスニング50点」⇒「リーディング100点、リスニング100点」に変更になり、リスニングの重要度が大幅にアップした。また、リーディングは発音、アクセント、語句整序などは単独で出題しないとされ、長文読解の性格を強めた。各設問自体も英語で表記された。リスニングはセンター試験ではすべて音声は2回読みだったが、1回読みの問題も出題された。



※「1990年～2005年＝筆記のみ200点」。 「2006年～2020年＝筆記200点、リスニング50点の平均点を合計して200点に換算」。

「2021年＝リーディング100点、リスニング100点の平均点を合計」。

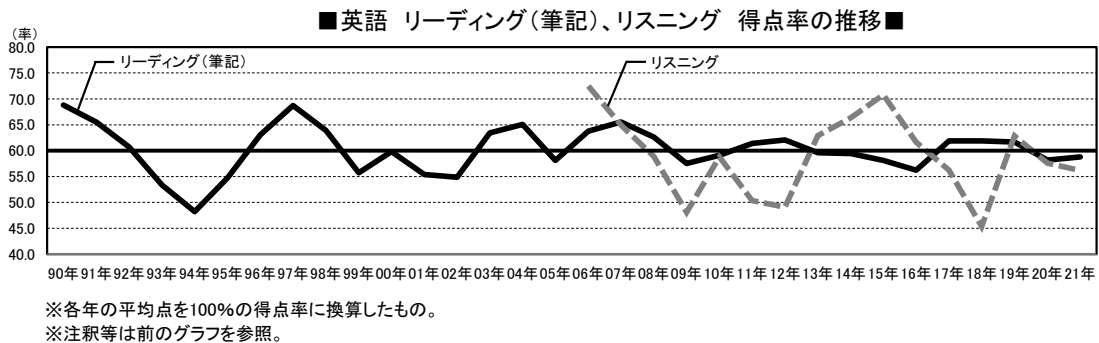
※受験者数は、「2006年以降＝筆記(リーディング)」を掲載。

平均点は「リーディング=58.8点(+0.6点)」「リスニング=56.2点(-1.4点)」、「合計=115.0点(-1.1点)」。

特に英語は共通テストの中でも大きな変更があったが、平均点はいずれも前年並みとなった※。

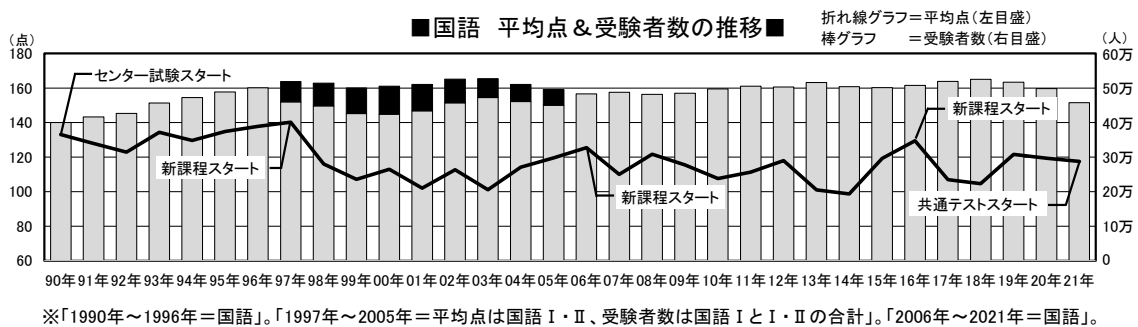
RL 別に得点率を見てみると、リーディングは近年6割ラインで安定。リスニングは変動しているうえ、配点がアップしたことで、受験生にとっては差をつけるカギとなろう。

※前年の平均点差 … 前年のリーディング(筆記)、リスニングはそれぞれ100点に換算、合計は250点を100点に換算したものと比較。



●国語

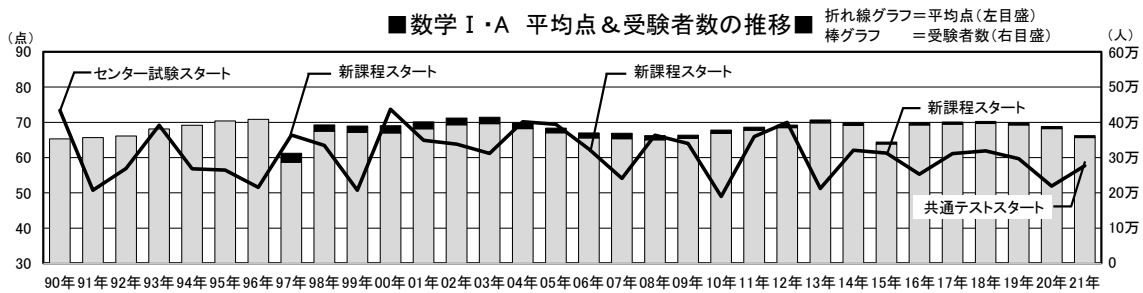
新たな題材として出題の可能性が示されていた「実用的な文章」は、結局、メインの題材としては出題されなかった(第2日程も同様)。そのこともあり、内容はセンター試験に近く、平均点も117.5点(-1.8点)で前年並み。受験生数は、英語に次いで大半の受験生が受けるため、共通テスト自体の欠席者増のあおりを受けて大幅減となった(-4.1万人)。



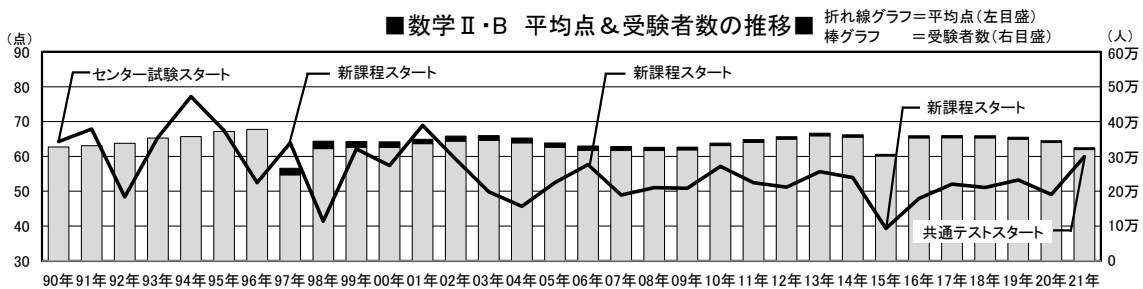
●数学Ⅰ・A、Ⅱ・B

読まなければならない問題の分量が増え、特にⅠ・Aは試験時間が10分延びたものの、回答に時間がかかる出題だった。Ⅱ・Bは公式の暗記だけで解けるような問題や、計算量の多い問題は減り、本質的な理解が求められる問題が見られた。

しかし平均点はいずれもアップで、Ⅰ・Aは57.7点(+5.8点)、Ⅱ・Bは59.9点(+10.9点)で大幅アップした。Ⅱ・Bは2001年の68.9点から6割ラインを超えたことが1回もなく、今年もあと1歩届かなかったが、それでも19年ぶりの59点台となった。

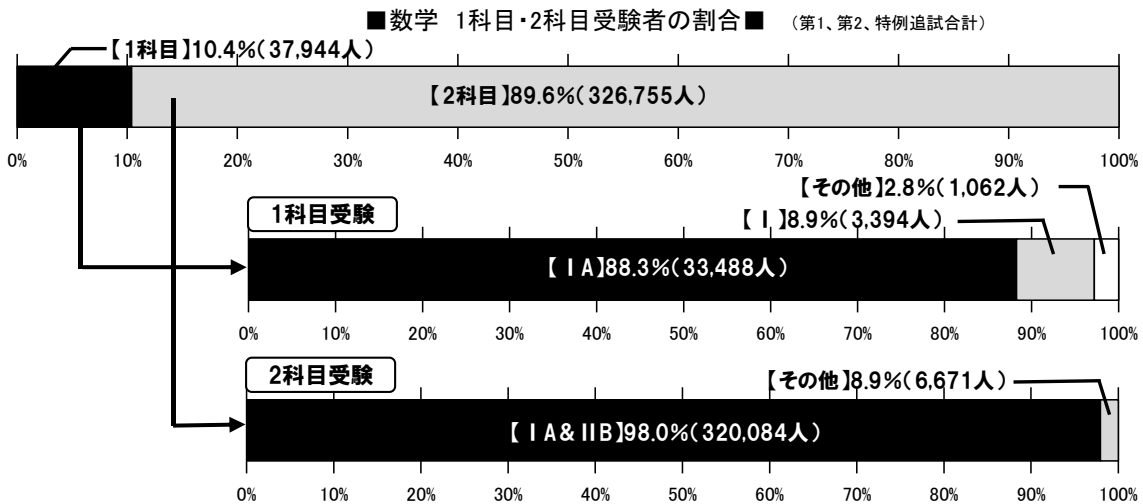


※「1990年～1996年＝数学Ⅰ」。「1997年～2021年＝平均点は数学Ⅰ・A、受験者数は数学ⅠとⅠ・Aの合計」。
 ※新課程初年度(1997年は1998年も)の経過措置科目は含まず。受験者数が大きく減っているのはその受験者を含まないため。



※「1990年～1996年＝数学Ⅱ」。「1997年～2021年＝平均点は数学Ⅱ・B、受験者数は数学ⅡとⅡ・Bの合計」。
 ※新課程初年度(1997年は1998年も)の経過措置科目は含まず。受験者数が大きく減っているのはその受験者を含まないため。

数学受験者のうち、1科目のみの受験者はわずか1割。9割が2科目受験者だ。1科目受験者はほとんどがⅠ・A、2科目受験者はほとんどが「Ⅰ・A&Ⅱ・B」となる。

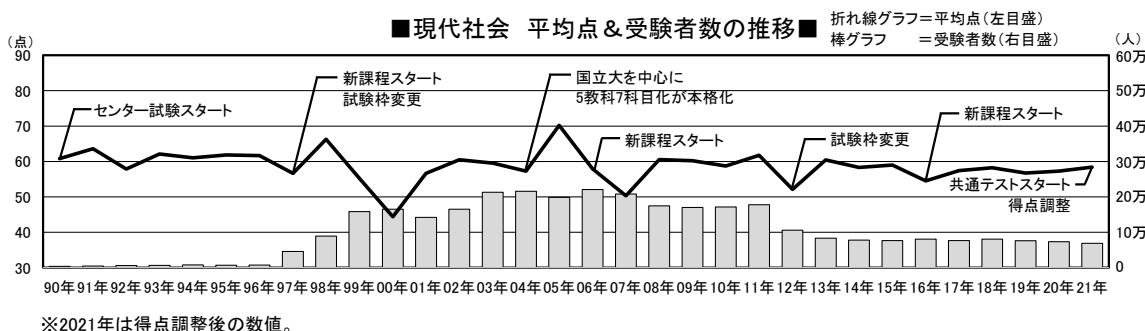
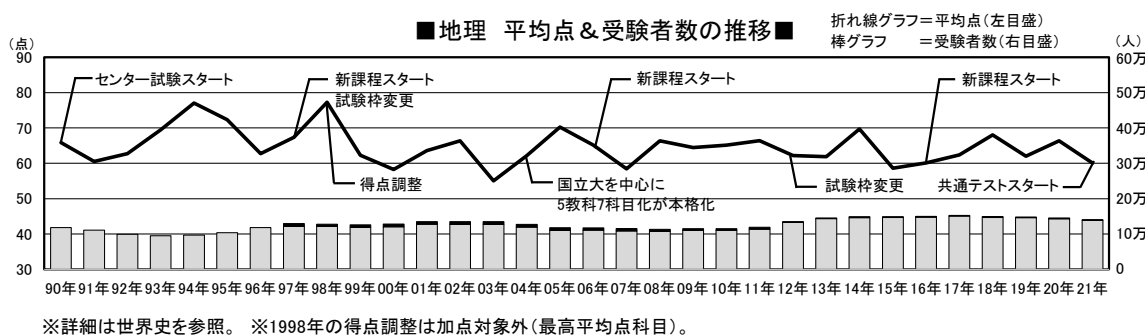
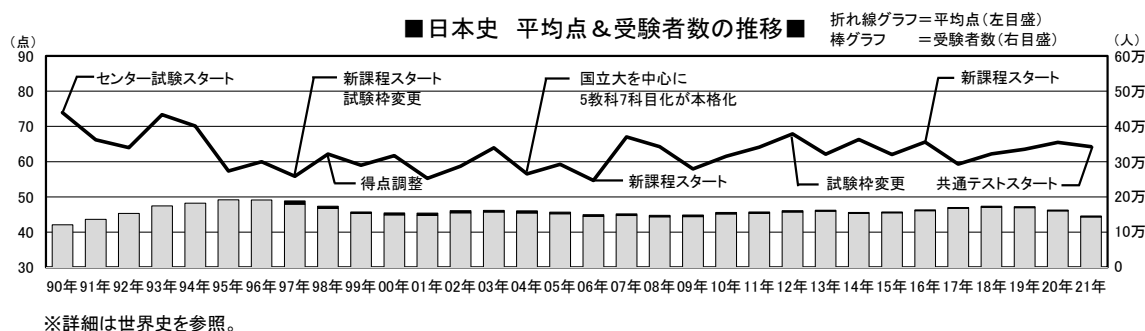
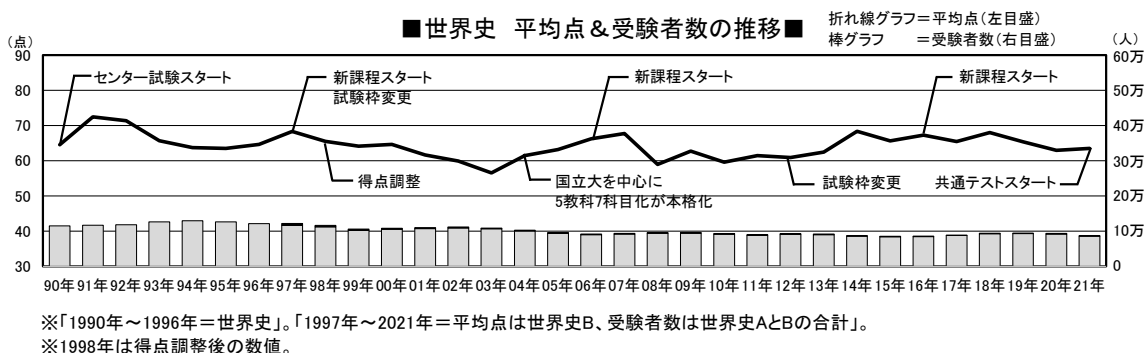


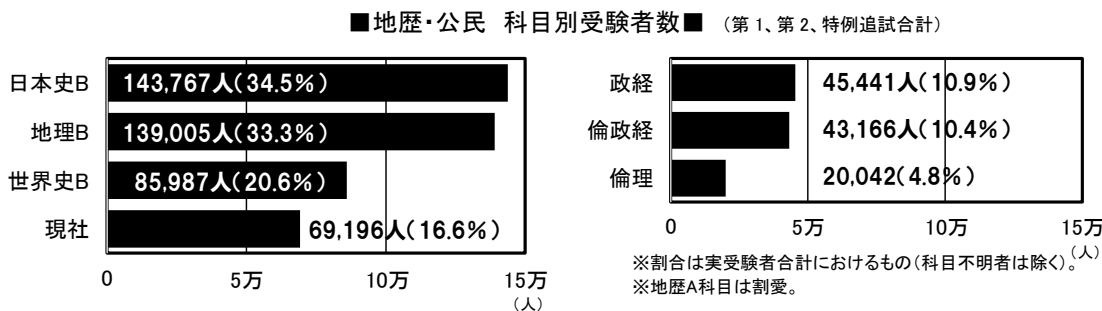
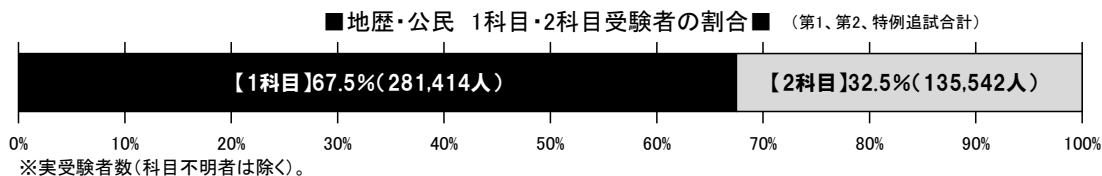
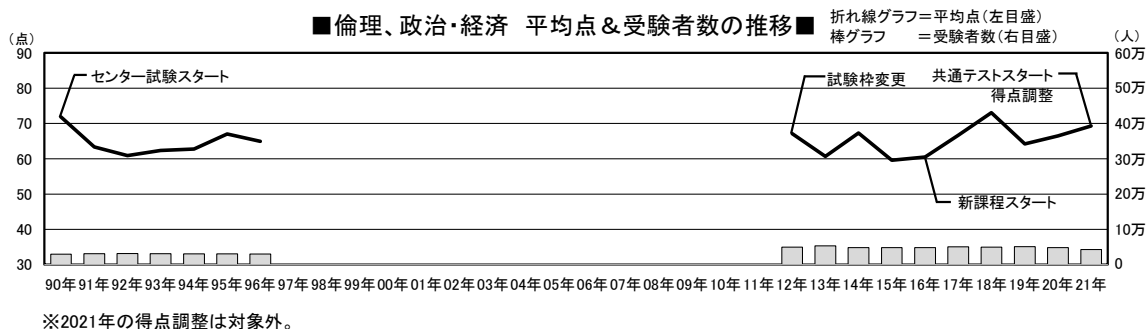
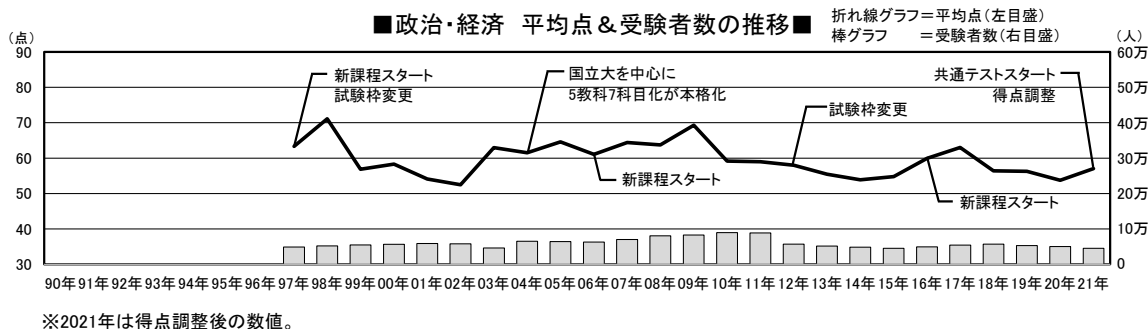
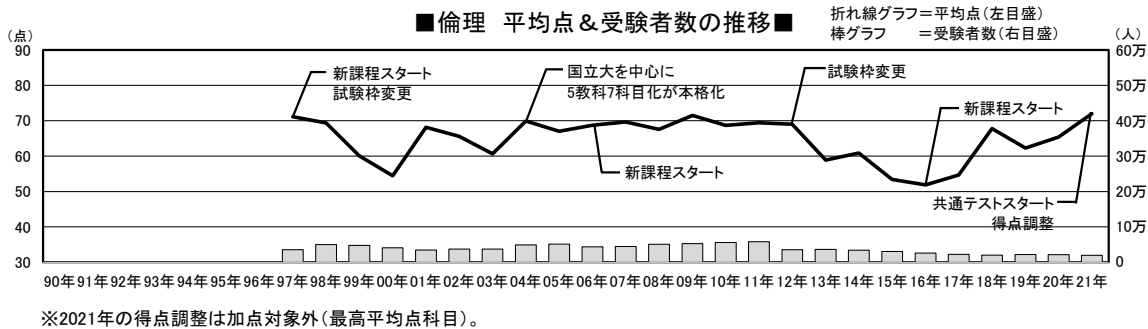
●地歴、公民

知識の暗記から、その理解、活用といった思考力への転換が色濃く表れた。単純な知識を問う問題は減少し、資料や文章が与えられて多角的、多面的に考察する問題が増加。資料のバリエーションも豊富。探究活動の場面を設定した問題も目立った。

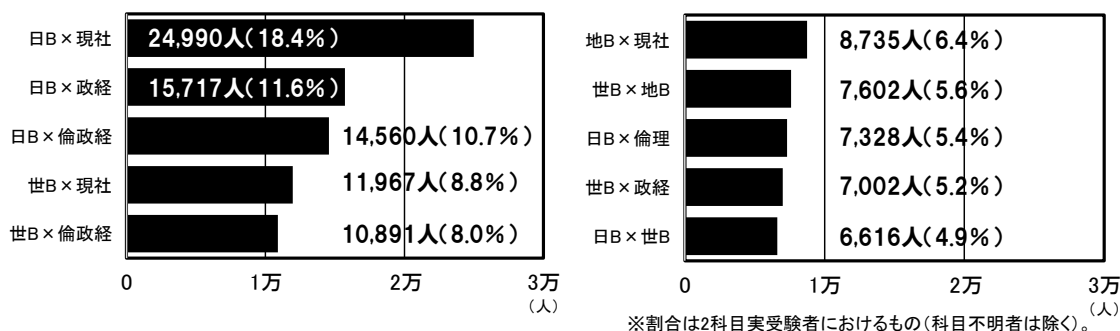
平均点は、前年並みが「世界史B=63.5点(+0.5点)」「日本史B=64.3点(-1.2点)」「現代社会=58.4点(+1.1点)」。アップは「倫理=72.0点(+6.6点)」「政経=57.0点(+

3.3点)」「倫政経=69.3点(+2.8点)」。ダウンは「地理B=60.1点(-6.3点)」となった。倫理は7割を超え、政経との差が20点以上となったため、得点調整が行われた(P.2下参照)。上記は得点調整後の平均点)。





■地歴・公民 2科目別受験者 科目組み合わせ (第1、第2、特例追試合計) (上位10パターン)



2科目受験の組み合わせは、上のグラフに示したもので全体の85%となる。「地歴B科目(日本史B、世界史B)×公民(現社、政経、倫政経)」が多い。

地歴・公民の試験枠はもともと分けられていたが、2012年から理科とともに試験枠が統合された。試験枠統合の代償は大きく、出願時には1科目、2科目受験の事前登録が必要となり、各大学の入試は「第1解答科目」の扱いで複雑化した。

試験枠統合のメリットは、「地歴からの2科目選択」が可能となることだったが、2021年は、地歴2科目受験者はわずか13.1%(2科目受験者における割合)、17,813人にすぎない。

●理科

会話や実験、日常的な現象を題材に扱う問題が出題。資料をしっかりと読み、事象を科学的に考察する力が求められた。ただし科目によっては第2回の試行調査と比べて、新傾向の色合いや難易度は抑え気味に。一部、分野融合の大問も見られた。発展科目は大問の選択が廃止され、全問必答となった。

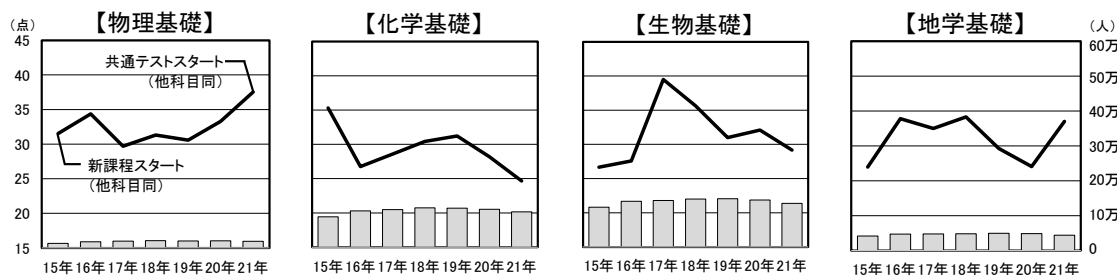
平均点は「生物=72.6点(+15.1点)」が大幅アップの7割超え。ほかの発展科目もアップして「物理=62.4点(+1.7点)」「化学=57.6点(+2.8点)」「地学=46.7点(+7.1点)」。

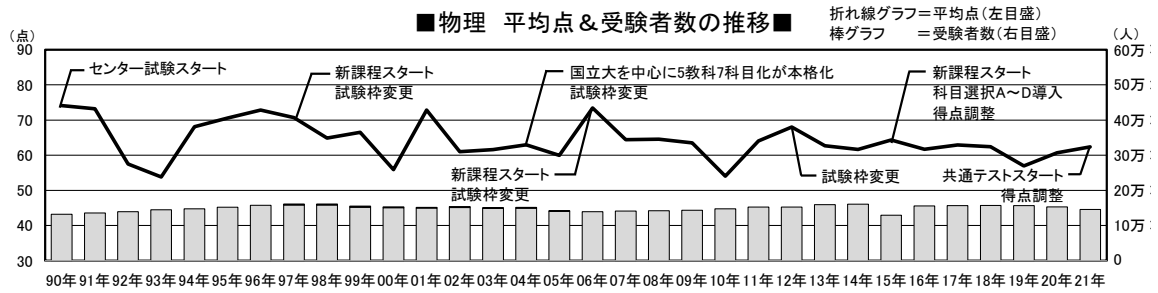
基礎科目は「物理基礎=37.6点(+4.3点)」「化学基礎=24.7点(-3.6点)」「生物基礎=29.2点(-2.9点)」「地学基礎=33.5点(+6.5点)」。

特に第2回試行調査で正答率の低かった物理(38.86%)、生物(32.63%)で高い平均点となった。

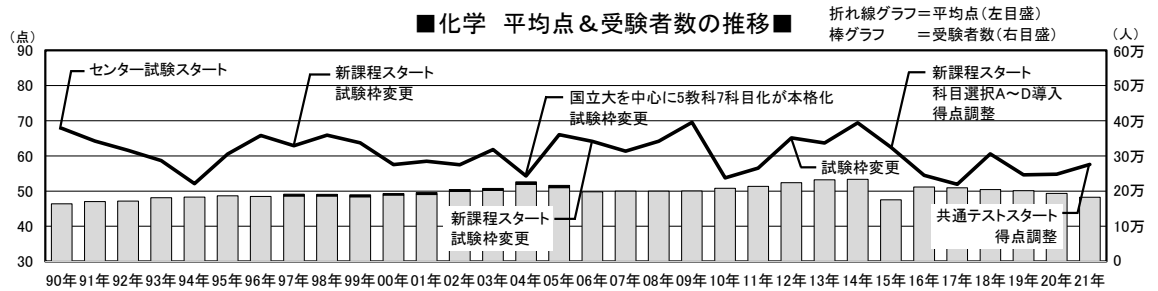
発展科目では生物と化学の差が20点以上となり、得点調整が行われた(P.2下参照。上記は得点調整後の平均点。地学は受験者1万人未満のため対象外)。

■理科 基礎科目 平均点&受験者数の推移 ■折れ線グラフ=平均点(左目盛) 棒グラフ=受験者数(右目盛)

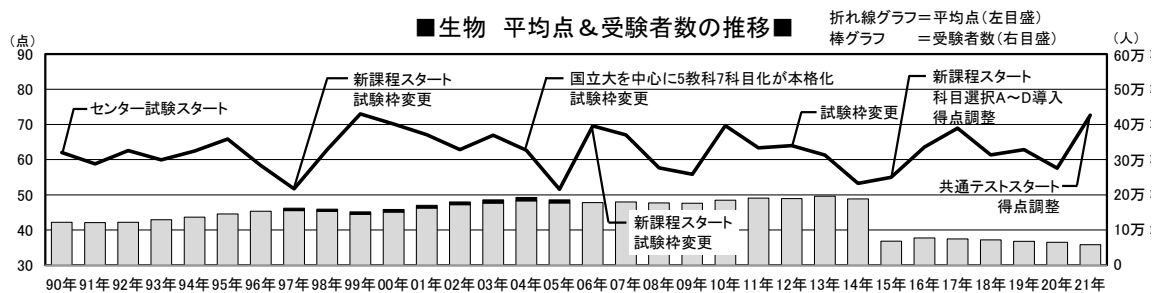




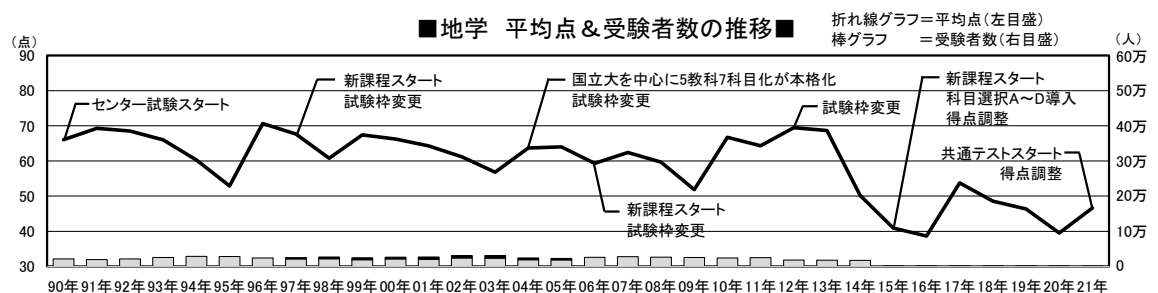
※「1990年～1996年＝物理」。「1997年～2005年＝平均点は物理ⅠB、受験者数は物理ⅠAとⅠBの合計」。「2006年～2014年＝物理Ⅰ」。「2015年～2021年＝物理(物理基礎の受験者数は含まず)」。※2006年、2015年の受験者数には経過措置科目は含まず。
※2015年と2021年は得点調整後の数値。



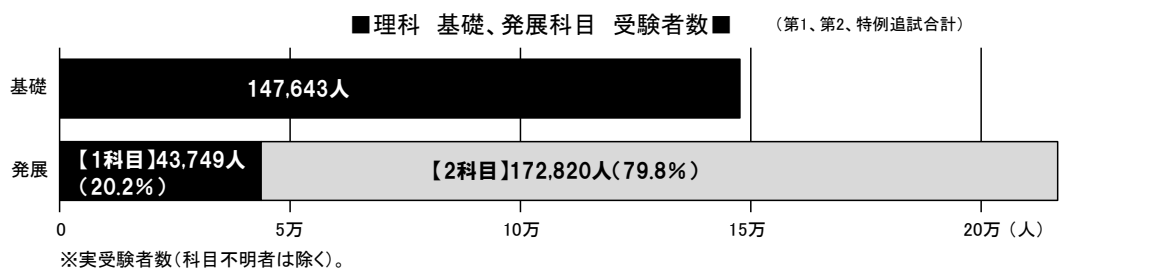
※詳細は物理を参照。



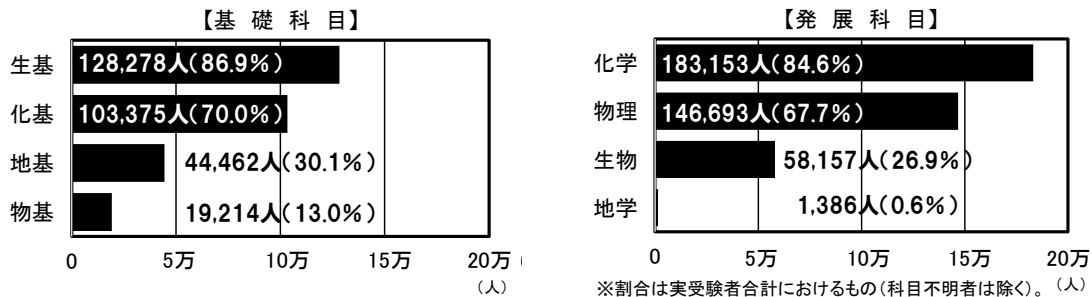
※詳細は物理を参照。 ※2021年の得点調整は加対象外(最高平均点科目)。



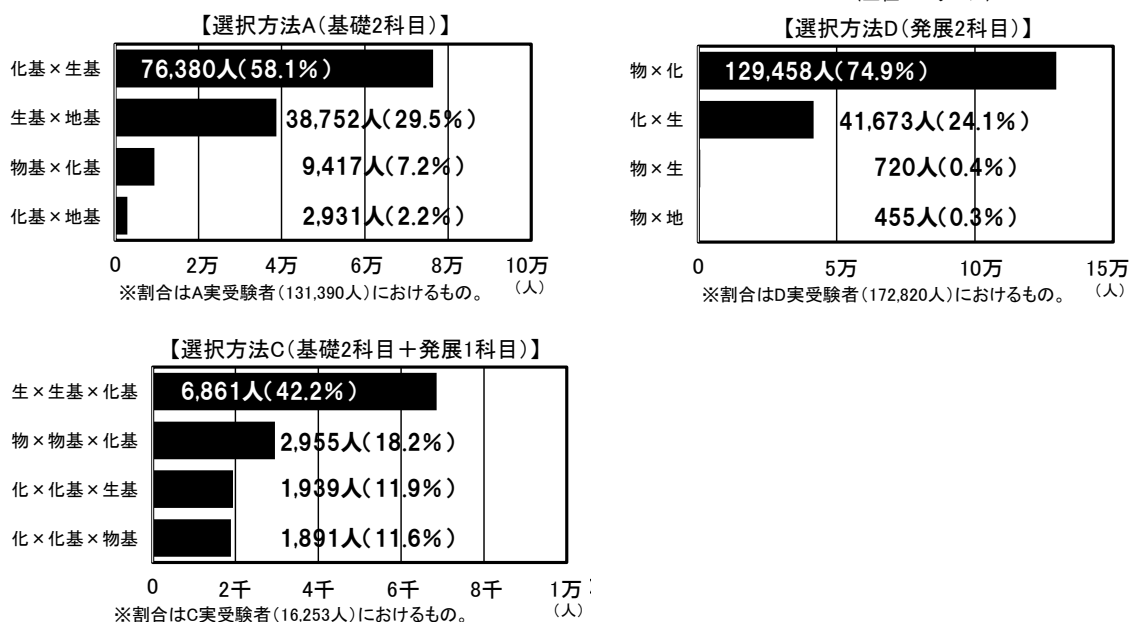
※詳細は物理を参照。 ※2015年、2021年の得点調整は対象外(受験者1万人未満)。



■理科 科目別受験者数■ (第1、第2、特例追試合計)



■理科 選択方法 A、C、D 受験者 科目組み合わせ■ (第1、第2、特例追試合計)
(上位4パターン)



理科は2015年から基礎科目と発展科目に分かれ、受験生は出願時にA～Dの科目選択方法※を登録することとなった。

※「A=基礎2科目」「B=発展1科目」「C=基礎2科目+発展1科目」「D=発展2科目」。

スタート当時はCが注目を集め、学習指導要領における3領域の履修を入試で具現化したものと考えられていた。しかしCが利用できる大学はそもそも多くはない。国公立大では文系学部はAかB、理系学部はDが中心だ。Cが利用できるのは教員養成系学部(A～Dいずれも可)や一部の理系学部(CまたはD)に限られる。そのためCの受験者は1.6万人と非常に少ない。

また、これらの学部ではCの場合、「同一名称(例;生基と生)の科目の組み合わせは不可」という学部が多い。ところが2021年は、Cで同一名称を選択した受験者は92.0%にもなる(C受験者における割合)。確かに教員養成系などでは同一名称を可とする学部も見られるが、AかBのどちらか高得点判定を狙ったケース、つまり保険受験が多いと想定される。Cは受験者が少ないうえ、理科3領域の理念はあまり実現できていない。

●スタナイン

スタナインは今年から出された各受験者の科目別成績で、得点の分布により、成績を9段階で表示する。大学は例えば「全科目の成績が6以上の者を抽出し、その上位10名を合格とする」などの活用が可能となる。

2021年入試でスタナインを合否に活用した大学はない。大学の視点で言えば、これまでとは異なる選抜が可能となり、活用すべき成績だと思われる。しかし受験生の視点で言えば、自分の合格可能性がわかりづらくなってしまう。

気になるのが公表される日程だ。予備校等の自己採点でスタナインが出たとしても、判定がずれる可能性がある。そうなると入試センターの発表を待たなければならない。今年の発表は2月4日、国公立大の一般選抜の出願締切前日だった。今年は第2日程があったため、来年以降は違う日程になるだろう。少なくとも国公立大の一般出願前にはほしいところだ。

以下に今年の各科目のスタナインをグラフで示した。第1、第2日程は当然問題が異なるが、入試センターによれば公表されたスタナインは第1、第2共通ということだ。

■主要科目スタナイン■ (第1、第2共通)

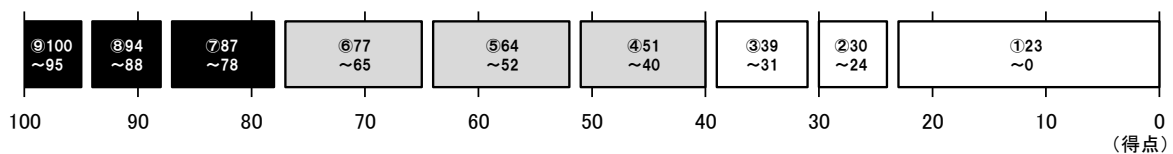
※グラフ横軸は得点、マル数字はスタナインの成績、数字の範囲は得点を表す。

※各段階は受験者の集団を得点順におおよそ以下の割合で分割。

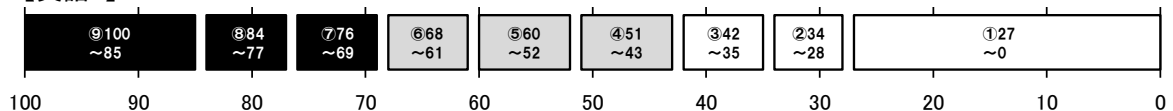
「①=4%」「②=7%」「③=12%」「④=17%」「⑤=20%」「⑥=17%」「⑦=12%」「⑧=7%」「⑨=4%」。

※大学入試センター「段階表示換算表」(2月4日発表)より作成。

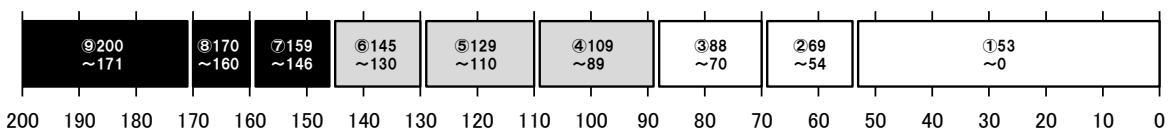
【英語R】



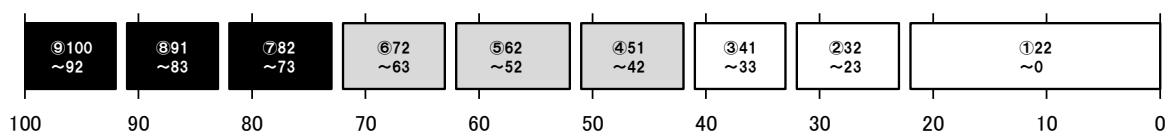
【英語L】



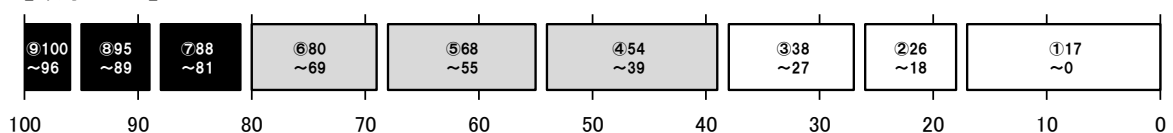
【国語】



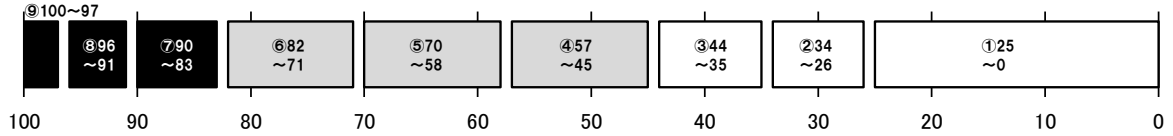
【数学Ⅰ・A】



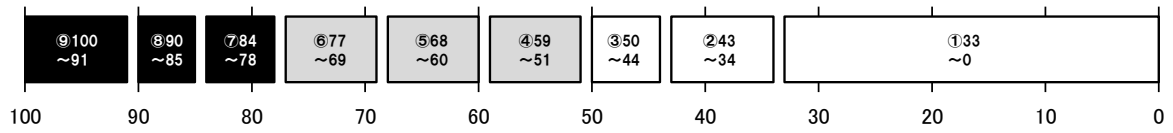
【数学Ⅱ・B】



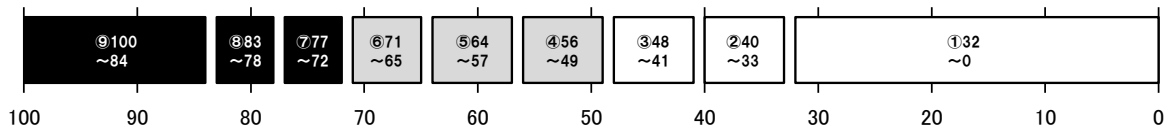
【世界史B】



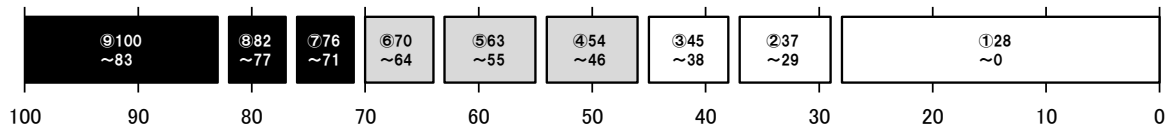
【日本史B】



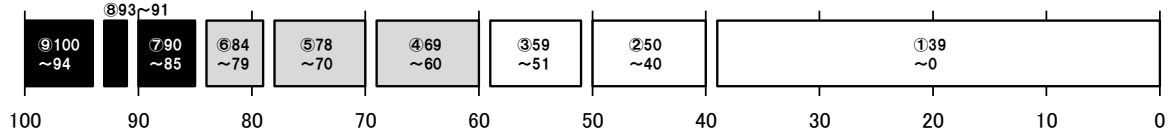
【地理B】



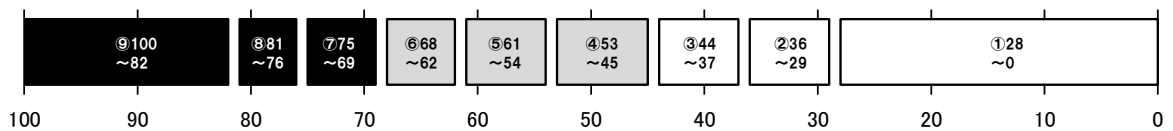
【現代社会】



【倫理】



【政治・経済】

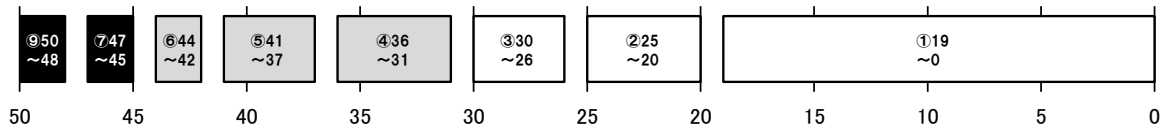


【倫理、政治・経済】

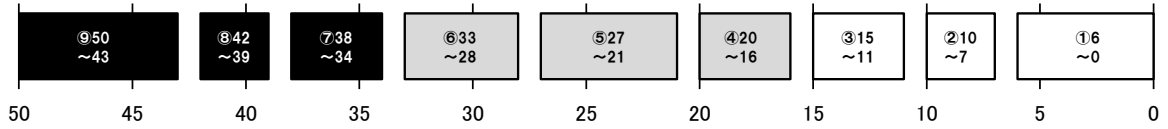


(次ページへ続く)

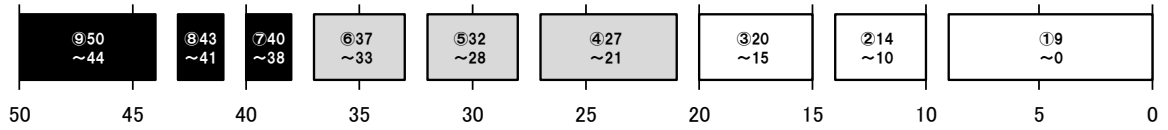
【物理基礎】 ※8段階はナシ。



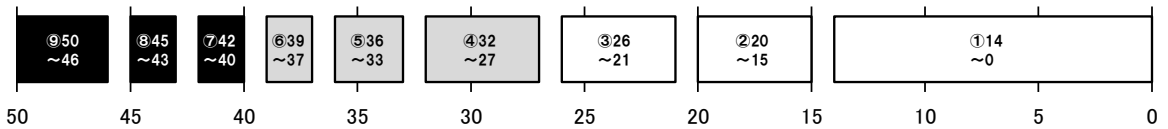
【化学基礎】



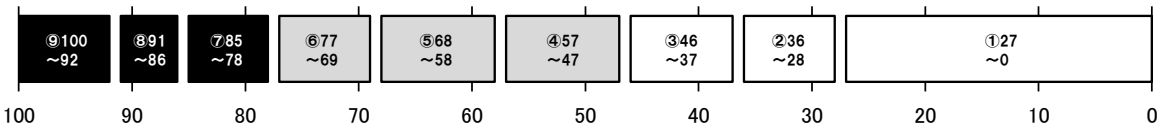
【生物基礎】



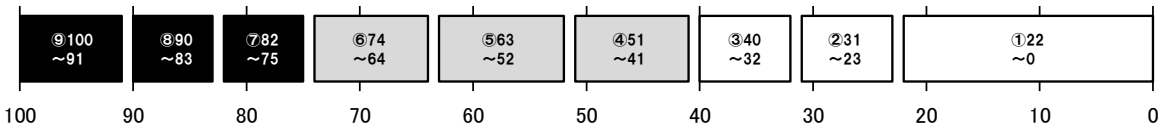
【地学基礎】



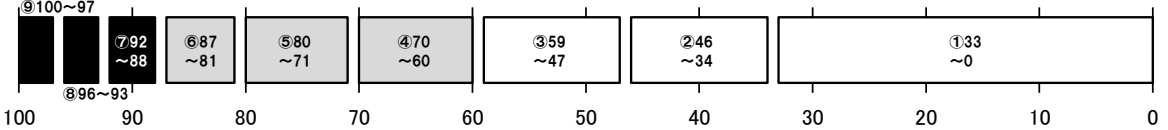
【物理】



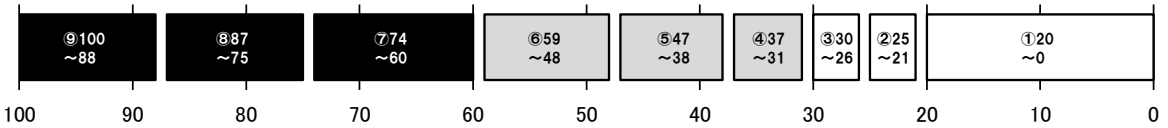
【化学】



【生物】



【地学】



本記事を初の共通テストの記録として残していくにあたり、もう 1 点、特筆しておくべきことがある。それは「何も起きなかった」ということだ。新型コロナ第 3 波の真ただ中、受験者数約 50 万人、試験場数 681 会場（第 1）で、クラスターが発生した報告は 1 件もない。入試センターや各大学をはじめとした実施関係者の尽力の結果にほかならない。

(2021.3 石井)